Takashima Toujyu Kai

会報

No. 34
2024. 1.18

高島藤樹会

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発行
NPO法人 高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156
http://takashima-tojukai.com/

高島が輩出した二大教育者
中江藤樹先生と清水安三先生

初代会長 上田 藤市郎

論語の巻第八に、「子曰、有教無類（だれでも教育によって、立派になる。）」という言葉がある。

人間は、時代を超えて常に争いを繰り返し、かけがえのない命を奪い、長年にわたって築き上げた文化を破壊し続けている。この現状を見かねて、各国の代表が集まってみても、国々の意見がまとまらず、有効な解決策を見いだせないままである。戦争にまきこまれている家族の悲しみはあまりにも甚大で、子どもたちがおかれている状況に心が痛むが、どうすることもできない。

多くの人々が待ち望んでいる平和な社会はどのようにすれば実現し、それを維持していくことができるのであろうか。その解決策はつまるところ、孔子のいう「有教無類」なのではないかと思われる。この解決策は、とてつもなく時間がかかることであり、理想的すぎるように見えるけれども、本当は最短の道であるようにも思われる。人の心が変わらなければ、社会は変わらない。

四百年も前の人である、中江藤樹先生の生き方は、今もなお、教育者として受け止められている。先生の思想は幅広く一言では言い表せないけれども、ひとり一人の「心の育て」というものに重点がおかれている。自ら藤樹書院を開き、直接、若者や村の人達に、人の生き方を語り、手紙のやりとりを通じて遠方の者への指導に当たった。その方法は、先生自身が厳しく自分自身の心を見つめる態度を保ちながら生涯を過ごしておられることである。まさに自反慎獨そのものであった。戦乱が休止した江戸初期のことであるから、世の中の平安は人々の願いであり、人間の「心の育て」が社会の平安につながるという確信があっただろう。自分の仕事は、この道を弘めることであり、天命であるという自覚をもっておられたのであろう。

この藤樹先生を敬慕して尽きなかった人が、清水安三先生である。先生は、六歳の時（明治三十年）に藤樹祭に参加して感動し、「藤樹さんになってこまそうか」と語っている。初志を貫いて、同志社大学を卒業後、宣教師として中国に派遣され、北京市の朝陽門外に崇貞学園を創立し、藤樹書院のような学園にしたいと言った。当時の貧民街の少女たちに勉強を教え、仕事を教え、両親を通じて社会を変える事業を行った。しかし、一九四四年の敗戦ですべてを失って帰国した。にもかかわらず、不死鳥のような精神で、東京に桜美林学園を創立し、先生の教育立国の精神は今に引き継がれている。

「学而事人（学んで人に事える）」は、人間は自分のためばかりに学ぶのではなく、人に奉仕するように努めるべきであるという趣旨である。ここにも、個人の心磨きが社会の変革につながるという視点がある。清水安三先生は、戦争の悲惨さを骨髄まで体験した人で平和への思いは深いものがあったと思われる。激動の二〇世紀に中国、日本の両地に教育者としての信念を貫きとおし、自らは何も求めず神から与えられた使命を果たすことに邁進された。

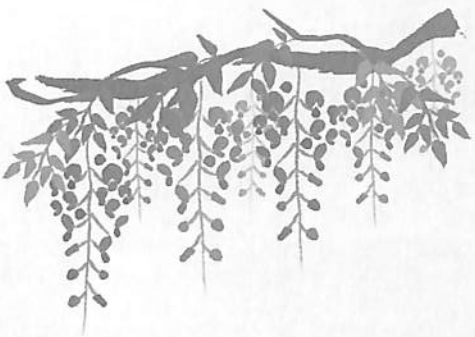
江戸時代と明治から昭和にかけて、この高島の地に生まれ、前者は天命を、後者は使命を自覚して教育こそが、人を育て、社会を変える大きな力であることを確信していた二人の教育者は敬服するに余りある。私たち後世は、今どういう思いでこの巨人の遺志を伝えていくべきか思いを深くしたい。それぞれの関係者の努力で、少しずつ子供たちに浸透していっているが、このふたりの教育者をいつも併せて語っていく責務が、私たちに課せられている。

コラム：吉田公平先生（東洋大学名誉教授）

西晋一郎の中江藤樹論

西晋一郎が中江藤樹については、管見の限りでは、『藤樹先生の学徳』（昭和六年。渾沌社出版部）に収める「藤樹の学徳」「報本反始」、『東洋道徳研究』（昭和十五年。岩波書店）第五章「中江藤樹の学」などにおいてまとまった言説を残している。しかるに西晋一郎が中江藤樹論を開示する際に用いた論理構成の特色は「即」の論理である。西田幾多郎なども「一即多」などと、「即」の論理が多用されている。しかし、なぜそのように「即」の論理が持ち出されているのかが分かりにくい。そのために西晋一郎・西田幾多郎の論旨がわかりにくい。一つの理解の仕方としては、朱子学がいう理一分殊論（本体としての普遍的「一者」が現象界に作用すると個別者として顕現すること）が参考になる。この理一分殊論は陽明学では渾然一体論という表現をとる。朱子学では本体とは未だ発動していない静態をいい、作用とは未発の静態が発動した已発の動態をいう。未発の本体と已発の動態は繋がりを持つものの、本体と作用ははっきりと静と動とに区別される。陽明学の「即一」論は本体と作用は繋がりがあることはもちろんのこと、働きの流れにおいても、已発の作用は未発の本体が発動したものであるから、未発・已発は渾然一体であり、両者は切り離せない。朱子学と陽明学の違いを如実に示すものである。人間の実在（心）と本質（性）をめぐる立論である。朱子学・陽明学などはこの心性論をめぐって賑やかに論議した。何故か。「救われるか否か」が係っていたからである。彼らは人間の本性は生得的に完全に善であるという性善説を信奉した。その本性が順調に発揮すれば悪の世界に陥ることはあり得ない。つまりは悪から救われる。本性を順調に発揮させるにはどうすればよいのか。まず第一には本性が善であることをしっかり覚悟すること。この覚悟を体認ともいう。第二には、本性が順調に発動するのを阻害する要因（私欲・我欲）に打ち克つ努力をすること。このことを「工夫する」という。他力（救済する神など）に依存すること無く、あくまで自力を基本とするいわゆる自力救済論である。中江藤樹の心性論も基本的には自力救済論である。

さて西晋一郎は中江藤樹の心性論については、殊更に深入りして開示していない。西晋一郎の「即一」論が展開されているのは、本体と作用の関係論の分野ではない。そうではなくして、作用論の分野においてである。「親に孝」とは、即「君に忠」であり、即「天皇に忠」であるとか、「郷土愛」は即「国家愛」であるとか。次元を異にする作用を「即一」の論理で縦横無尽に展開される。なぜこのような立論になるのであろうか。西晋一郎の思想、中江藤樹理解を解析する鍵である。なかなか一筋縄では把握できない。西晋一郎の心性論を理解するためには『中庸解・續解通釈』を理解する事が肝心なのだが、これが難儀である。改めて考えてみたい。



ひじりの声　上田　藤市郎

藤樹書院の正面左側に「致良知」と書かれた扁額がある。江戸時代の書院の玄関に掲げられていたもので、明治の書院焼失の際に、上小川の人々が取り外してくださったお陰で現存していると聞いている。この「致良知」の書体には、特徴があり、すべての文字の先端が蔓のように湾曲しており、一説に、「鳥虫篆」という篆書のひとつであると知人から教わった。虫というイメージから蚯蚓（ミミズ）の動きを模したものかと思ったが、そうではなくて、和紙などを食う紙魚（シミ）が和紙を蝕んだ痕がくねくね曲がっている形から発案された書体だという。中国では学問所、書院などの門柱や扁額にこの書体が掲げられているそうで、ここからは、小生の推測であるが、紙魚に親しむ人々とは、常々、書物を身近に置き、読書、学問に没頭する人々、文武の文にこそ重きをおく人々を指しているのではないかということである。孔子さまの文治政治の象徴ともいえるのである。

藤樹先先生は、中国の書物を通じて朱子学、陽明学を究明された。先生が、どの文献からこの書体に関心をもたれたかは定かではないが、先生の祖父母の神甕にもこの書体が彫られていることからも、学問一筋の先生の心意気が伝わってくる。

藤樹人間学塾…藤樹思想を学び考え実践する

塾長　田中　清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに自らの頭で考え、時事問題と組み合わせて皆で議論しながら思考を深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

■令和五年九月、安曇川公民館で第百四十一回人間学塾を開きました。参加者は九名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第五巻
仁虐報の第三話～第五話

●今日のポイント

・羅氏は仁の行為を楽しんでやっていた。楽しむことが大事。
・仁は人間にとって最も普遍的で包括的、根源的な愛とされる。
・無明（真理に暗い）を除くために必要なのは光明であり、親鸞はこれを智慧の光明と呼び、私たちもその光に出遭うならば生死、善悪を初めとする二元相対の世界を離れ、ついに仏（一元絶対の世界）になるとした。

◇フリートーキング

・「一元絶対の世界があることが分かって興味深い。この塾は貴重な場だ」

■十月、第百四十二回人間学塾を開きました。参加者は十名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第六巻
淑睦報の序、第一話、第二話

●今日のポイント

・私たちに本来、万物一体の仁心が備わっているということは、森信三師が説かれる、我われ人間自体が、絶対的「いのち」である大宇宙生命（神）の分身である、とつながる。
・「いまを生きる」ということは、「今日が自分の最期の日になるかもしれない」と思って生きるということだ。そうすることで、今日という日を、自分の人生の中で最善の一日にすることができるだろう。（ネルケ無方）

◇フリートーキング

・「他人に打ち勝とうとするよりも、昨日、今日の自分を少しでも高めていきたいと思った」

■十一月、中江藤樹記念館で第百四十三回人間学塾を開きました。参加者は七名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第六巻
廉貪報の序、第一話

●今日のポイント

・廉の境地にある時は万物一体に仁が明らかで必ず素晴らしい報いがある。
・善行をすることにより、五福のいくつかを得ることができる。
・貪る者は、金銀を惜しみ自・他のために使わないことは愚痴で、禍も山のように集まる。

◇フリートーキング

・「お金といのち。いのちは有限だから大切にしなければならない。お金は生きた使い方をしなければならないと思った」

■十二月、安曇川公民館で第百四十四回人間学塾を開きました。参加者は十名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第六巻
廉貪報の第二話～第四話

●今日のポイント

・普通の人は、貪る時に財産が増え、貪らないときは財産が増えないと考える。しかし廉直であっても決して財産を失わない。
・人間は皆、空っぽのタライのような状態で生まれてくる。そしてそのタライに自然やたくさんの人たちが水を満たしてくれる。他に幸せをあげようと水を相手に押しやろうとする幸せは自分の方に戻ってくる。・・・。

◇フリートーキング

・「永平寺で一泊禅修行をしたことがある。財産をあの世へ持っていけないので生きている間にいかに時間を使うか、実践活動するかだと思う」

等の意見をいただきました。ありがとうございます。

人間学に関心のある方は是非お越しください。無料です！

藤樹人間学塾　今後の予定

二月三日（土）、三月二日（土）、四月六日（土）、五月十一日（土）
■時間　（原則）十五時～十七時
■場所　（原則）安曇川公民館

「藤樹紙芝居をCD・DVDにして」

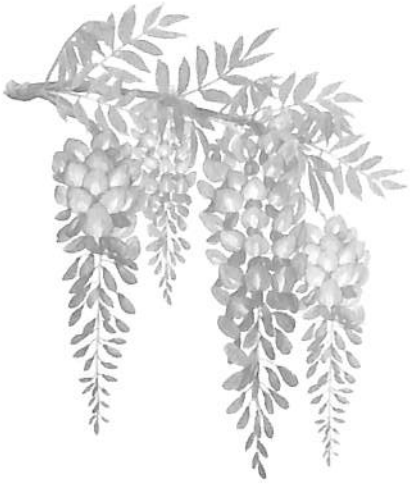
思想普及委員会　伊庭郁夫

藤樹紙芝居の在庫が少なくなってきました。そこで、令和四年度は現存する紙芝居をもとに五つの紙芝居を複数のグループにお願いして音声を吹き込んでいただきました。次に、動画編集で効果音を入れたり内容の補足説明のテロップを入れたりしました。CDにレーベル印刷をして、それらのデータを書き込んで完成です。

完成した作品は「馬方又左衛門」「大野了佐を教える」「車が田に落ちた」「そば屋の看板」「志を立てる」です。

完成したCDをもとに道徳の指導案をつけて高島市内の小学校に配布しました。道徳の授業や立志祭などに活用していただければ幸いです。更にこのCDをDVDに変換して広く活用できるようにし、良知館で販売しています。一枚五百円です。

令和五年度は、「熊沢蕃山の入門」「子どものころの藤樹さん」の二作品をDVDにしようと取り組んでいます。手作りの取組です。できるだけわかりやすく使いやすく活用していただけよう進行中です。完成しましたら、市内の小学校や良知館にお届けします。



藤樹先生 あれ これ

「儒式祭典」が開催される

藤樹書院（公益財団法人）主催の「儒式祭典」が、九月二十五日に藤樹書院において開催されました。

渕田豊朗理事長の開会のことばに続き、儒式の祭典が厳かに執り行われました。「賽主」、「助事」、「助奠」（二名）、「進盥」の祭官は、裃（かみしも）姿の地域の方々です。

令和元年度の儒式祭典での資料によると、儒式祭典について、「わが国では珍しい文公家礼（中国の宋の時代に書かれた儒家の礼儀作法の本）により執り行われています。昭和五十五年、市町村合併前の安曇川町から無形民俗文化財に指定されました。

藤樹先生の命日は明治六年一月一日から採用された太陽暦では慶安元年（一六四八年）十月十一日です。この日は太陰暦（旧暦）の慶安元年八月二十五日に当たるので、儒式祭典は、太陽暦変更後も八月二十五日に行われていました。暦の変更や学校行事の一環として児童が参拝できるようにとの配慮から明治十一年（一八七八年）から、ひと月遅れの九月二十五日に執り行われるようになりました。以後、九月の例祭として上小川村人により厳かに執り行われてきています。それまで祭典の形式は口頭伝承の形で受け継がれてきましたが、明治三十年（一八九七年）の二五〇年祭の時に京都の明倫舎と出雲路與通氏の助言指導を受け、現行の形に定まりました。」と記されています。

また、当日の資料によると、祭式順序は次の通りです。

序立（隣室で祭官が手を清める）
啓門（助奠が神前の張を上げる）
参神（賽主が拝礼を四度する）
降神（賽主が焼香し拝礼を二度する）
進（神）饌（助奠が進盥から十種の山海の幸を受け取り運び、賽主が神前に供える）
侑食（賽主がご飯に箸を立て、藤樹先生の霊に食を勧める）
初献（賽主が酒と肴を勧める）
読祝（賽主が祝文を読む）
亜献（賽主が再び酒等を勧める）
終献（賽主がもう一度の酒等を勧める）
闔門（助奠が神前の張を降ろす）
（説遺）（賽主が『藤樹規』を読む）
啓門（助奠が神前の張を上げる）
献茶（賽主が茶と菓子を勧め、祭官四人が左に並び、参加者全員が焼香、拝礼する）
撤饌（山海の幸を神饌と逆の順序で下げ、隣室の進盥に渡す）
辞神（賽主が拝礼を四度する）
闔門（助奠が神前の張を降ろす）
送主焚祝（祝文を隣室の火鉢で燃やし、礼をして終了する）

藤樹規

大学の道は明徳を明かにするに在り、民に親しむに在り、至善に止まるに在り、天命を畏れ、徳性を尊ぶ
右は持敬の要、進脩の本なり

博く之を学び、審かに之を問ひ、慎んで之を思ひ、明かに之を辨じ篤く之を行ふ
右は進脩の序

言忠信、行篤敬、忿を懲し欲を塞ぎ、善に遷り過を改む
右は身を脩むるの要

其の義を正しうして其の利を謀らず、其の道を明かにして其の功を計らず
右は事に處するの要

己の欲せざる所は人に施すること勿れ、行得ざる有らば反つて諸を己に求む
右は物に接するの要

「藤樹先生に学ぶ」小学校への出前講座

令和五年九月以降、田中清行会長による高島市内小学校への出前講座が実施されました。小学校の要請に応じて、道徳の時間に藤樹先生の教え・生き方等を学ぶために開催されたものです。十二月までの出前講座は、次の通りです。

●九月十二日、今津北小学校

・三年生を対象に
「藤樹先生の教え」の話、紙芝居「車が田におちた」のビデオ、児童との対話

●十月二十四日、マキノ東小学校

・三年生と四年生を対象に
「藤樹先生の教え」の話、紙芝居「そばやのかんばん」のビデオ、児童との対話

・五年生と六年生を対象に
「藤樹先生の教え」の話、紙芝居「馬方又左衛門」のビデオ、児童との対話

●十一月十六日、高島小学校

・二年生1組と2組を対象に
「藤樹先生の教え」の話、紙芝居「車が田におちた」のビデオ、児童との対話

●十一月十七日、青柳小学校

・四年生を対象に
「藤樹先生の教え」の話、紙芝居「大野良佐を教える」のビデオ、児童との対話

■この日、青柳小学校では一年生の学習に渕田京子理事が、六年生の学習には渕田豊朗副会長が出向いて、それぞれお話をされました。

●十一月二十七日、高島小学校

・一年生を対象に
紙芝居「子どものころの藤樹さん」、孝の図の話、児童との対話

藤樹先生についての学習を終えて

マキノ東小学校　三年　平山　大喜

とうじゅ先生は、自分の考えをほかの人に教えているところがすごいと思いました。もし、大宇宙がなかったら、ぼく・お母さん・お父さん・お兄ちゃんも生まれてこなかったので、大宇宙にすごくかんしゃしなきゃだめだと思います。

また、とうじゅ先生は同じ本を百回も読んでいて、字も上手だし、心にけがれがないから、すごい人だと思いました。四十一才で死んでしまったけれど、四十一年間でこんなにもいっぱいむずかしいこと（知しき）を学んだから、何でもできたのだと思います。

それから、とうじゅ先生は、「代表的日本人」という本の中で、五人の偉人の一人に選ばれているのでそんけいしています。そんなりっぱなとうじゅ先生が、ぼくと同じ高島市に住んでおられたことがとてもうれしいです。

マキノ東小学校　六年　美濃きぬか

私は転校してきたので初めて藤樹先生のことを知ったのですが、とてもすごい人だと思いました。自分・父・母・祖父・祖母とたどっていくと、最後は生命・太陽・地球・宇宙のたんじょうにまでつながることを知りました。約百三十七億年も前の宇宙のたんじょうが、今につながっていることにびっくりしました。たくさんの藤樹先生の教えを学ぶことができて、とても勉強になりました。その中でも、「なごやかな顔つきで」「あたたかい言葉で」「やさしいまなざしで」「相手の話をよく聴いて」「相手のことを思いやる」という『五事を正す』の教えはとても大切だと感じたので、これからは自分も実行できるようにがんばっていきたいと思います。

マキノ東小学校　六年　神藤　蒼依

三年生のころ、「貌・言・視・聴・思」や「致良知」などの藤樹先生の教えを立志祭で学びました。約四百年も前に、私の育った高島市にこのようなすばらしい考えを持った方がおられたことを知り、とても驚きました。今は六年生になりましたが、藤樹先生のように見返りを求めず、だれに対してもやさしく接し、一つのことに一生けんめい努力することができる人になれるようがんばります。

私は、まだ将来の夢が決まっていません。ですが、自分の夢が決まるよう、これからたくさん勉強をし、何事にもどんどん挑戦していきたいです。

「ふるさとウォーク」で藤樹先生を学ぶ（湖西中学校）

湖西中学校では、恒例になった一年生の「ふるさとウォーク」が実施され、その中で藤樹先生について学びました。その概要と事後のまとめ（ふるさと新聞）を紹介します。

■概要＝『湖西の風』（学校だより）から引用させていただきました。

一年生が、十一月一日（水）にふるさと高島の史跡や、中江藤樹のゆかりの場所を訪ねながら、歴史や偉人について理解を深める「ふるさとウォーク」を行いました。

学級ごとに分かれ、高島びれっじ一号館でキャンドルづくりを体験しました。【びれっじ周辺は、以前は、蝋燭町と呼ばれていたようです。】

そして、大溝の水辺景観まちづくり協議会の仁賀定夫さんから乙女が池周辺の歴史について、学年主任の橋本先生から、大溝城の歴史を学びました。そして、高島市歴史民俗資料館学芸員の白井忠雄さんからは、鴨稲荷山古墳にまつわるお話を聞きました。また、藤樹書院や藤樹記念館で藤樹先生のことを学びました。講話や体験により子どもたちは充実した時間を過ごすことができました。

藤樹書院で上田藤市郎先生のお話を聞く

当日は、秋晴れのすがすがしい天気に恵まれ、全員が仲間と励まし合いながら、踏破することができました。むくげの花の会の皆さんには、いっしょに歩いていただきながら、子どもたちの交通指導でも大変お世話になりました。そして、学校に到着した時には、アツアツの焼き芋を準備してくださり、とってもおいしくいただきました。

ご協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

藤樹記念館で武田基裕先生のお話を聞く

中学生の事後のまとめ

（「ふるさと新聞」から抜粋）

「中江藤樹先生」　廣田　華埜

中江藤樹先生は、江戸時代初期の儒学者で「日本の陽明学の祖」と言われています。中江藤樹先生（別名よえもん）の代表的な教えは、致良知、孝行、知行合一、五事を正す（貌・言・視・聴・思）などです。

中江藤樹先生は勉強にはげみ、有名になった二十七歳の時に家に帰って来ました。その理由は「母に孝行をするため」という大変優しい人でした。藤樹先生のような人への思いやり、優しさを大切にしたいと思います。

「中江藤樹」　城戸　有紗

中江藤樹先生は四一五年前の一六〇八年に生まれました。本名は原（げん）。通称よえもんと呼ばれていました。滋賀県に住んでいたが、鳥取から愛媛に行き、おじいさんに育てられました。十歳のころに中国の本『大学』を読み、「人はだれでも自分の行いを正しくすることが一番大切である」ということを知り、よく勉強しようと思ったのです。二十七歳の時、滋賀県に戻ってきて、村の人々に熱心に正しく生きることを伝え、多くの人に慕われ尊敬されたのです。私も藤樹先生のように、しっかり勉強しようと思います。

「近江聖人　中江藤樹！　～四つの教え～」　髙木　彩子

高島市で有名な中江藤樹先生……私はその素顔を初めて知りました。藤樹先生は主に四つの教えを残しています。致良知、孝行、知行合一、五事を正す、です。私は話を聞いている中で、『孝行』に興味を持ちました。藤樹先生は、九歳の頃鳥取の米子へ、十歳で学問に励むため愛媛の大洲へと、色々な所へ行き、多くの人にお世話になりました。そして、育ててくれた母にも、何か孝行をするため、『周りの人を皆大切に』という言葉を使いました。私はこの言葉を聞いたとき、自分は何もできていない、だから、これからは、家族にできることをしようと思いました。

この日の感想

ふるさとウォークを通して、高島市の歴史について知れたし、十三キロメートル歩いたり、キャンドルを作ったりする貴重な体験もできました。この体験を経験へと変え、もっと高島市のことについて知り、多くの人へ伝えていきたいです。本当に楽しかったです！

大溝城跡で橋本先生のお話を聞く

中江藤樹記念館通信⑮

「改めて 中江藤樹&中江藤樹記念館」

（令和七年度 新施設開館予定）

理事　武田　基裕

■近江聖人・日本陽明学の始祖

中江藤樹は関ヶ原の合戦の八年後、慶長十三年（一六〇八）に小川村（現在の安曇川町上小川）で生まれました。両親は農民でしたが、九歳の時に鳥取の米子藩に仕える祖父の養子となり、故郷の小川村を離れ、藩主の転封（御国替え）に従い四国の大洲（現在の愛媛県大洲市）に移った十一歳の時に学問の道にすすむ志を立てました。

勉学に励んだ藤樹は同輩にも教えましたが、二十七歳の時、郷里の小川で母親が独り住まいの身となったため、大洲藩主に辞職を申し出ましたが叶わず、母への思い止み難く脱藩帰郷しました。藤樹を慕って多くの者が続々と教えを受けに近江の地を訪れたのは藤樹自身が惹きつける魅力に溢れた人物であったからでしょう。

近江聖人　中江藤樹記念館

母に孝養を尽くしながら学問に励んだ藤樹は門弟を同志と呼んで共に学び、また、村人に分け隔てなく接しましたが、慶安元年（一六四八）、病気（喘息）のため四十一歳の若さで生涯を終えました。

藤樹はわが国で最初に聖人と呼ばれた人物であり、明代の王陽明（一四七二～一五二八）の思想に共感し、自らの学問を築いたことにより日本陽明学の祖とされています。

安曇川町上小川の藤樹神社北側にある「近江聖人中江藤樹記念館」は、中江藤樹生誕三八〇年を記念し、昭和六十三年（一九八八）に開館しました。コロナ禍のここ数年間は入館者数は減少しましたが、以前は年間一万人を超えるほどの入館者で活況を呈していました。コロナ禍前には戻りませんが、昨年度から入館者数も徐々に元に戻り始めました。日常の来館者への丁寧な展示物等の説明により、リピーターの方々もたくさん訪問されます。

■改修後、新たな施設へ

さて、ご存じのことと拝察しますが、中江藤樹記念館は令和六年度に改修リニューアルを行い、令和七年に新たな施設となります。

中江藤樹記念館は、中江藤樹に関連する遺品や遺墨、関連書籍などの収集、保管を担ってきた機能の他に、これまで高島歴史民俗資料館、朽木資料館、マキノ資料館が担ってきた市内からの出土品や歴史資料、美術工芸品などをはじめとする、高島の歴史文化を紹介する展示機能を新たに加えた施設としてリスタートします。

高島の歴史文化を学びに来られた方々に、改めて中江藤樹を知って頂く出会いの機会にし、中江藤樹が生まれ、その教えが育まれた高島の歴史文化のすばらしさをお伝えできる施設にするなど、より多くの皆様に満足いただける様な施設にしたいと思います。

このことから、令和六年度の改修リニューアルに伴い、当館を利用される皆様には大変ご迷惑をお掛けすることとなります。ご理解とご了承をいただきますようこの場をお借りしましてお願い申し上げます。

（引用：「良知館」リーフレット）

賛助会員一覧

★新規賛助会員のご紹介

令和五年十二月末日までに、ご加入いただきました賛助会員をご紹介します。ご加入ありがとうございます。

○伊丹製薬 株式会社
（高島市今津町下弘部）

★既加入の賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

○ウエストレイクホテル可以登楼
○税理士法人 淡海総合会計
○大津公証人会　白髭博文
○大溝工業 株式会社
○株式会社 大山建設
○岡本アルミ建材 株式会社
○川島酒造 株式会社
○川島織布 株式会社
○有限会社 クリエイト・マエダ
○株式会社 Grow—S
○有限会社 桑原組
○有限会社 宏和商事
○税理士法人 小畑会計事務所
○株式会社 才川食品店
○佐治タイル 株式会社
○株式会社 澤村
○株式会社 シグマックス
○清水安三記念館
○有限会社 白浜荘
○新旭電子工業 株式会社
○杉橋建設 株式会社
○ソエダ 株式会社
○高島鉱建 株式会社
○田中マネジメント事務所
○株式会社 TADコーポレーション
○鉄屋商事 株式会社
○寺子屋まなざし童心塾
○有限会社 天平フーズ
○株式会社 戸井薬局
○とも栄 藤樹街道本店
○株式会社 ナカサク
○ナカショウ 株式会社
○株式会社 中田運送
○中村印刷 株式会社
○株式会社 中村測量設計
○ニッケイ工業 株式会社
○八田建設 株式会社
○有限会社 馬場塗装
○富士包装紙器 株式会社
○戸次会計事務所
○株式会社 ホリゾン
○有限会社 丸三旅館
○株式会社 ミヅホ工芸
○株式会社 森下工業
○株式会社 ヨシダヤ
○株式会社 リンクス
○有限会社 綿庄食品店

（五十音順）